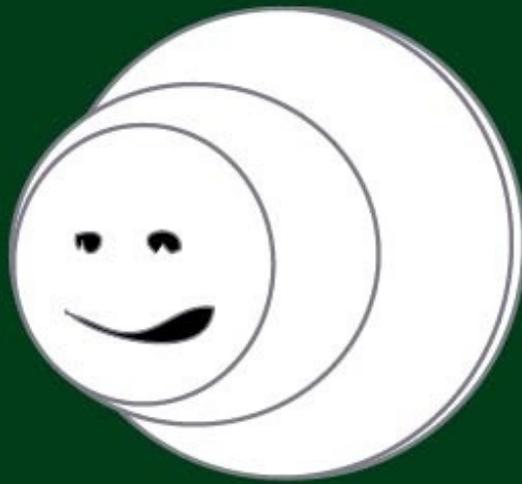


ノブ君



カラピー



「ねえ、たまには反対にクビを回してくれないかい？」トイレに入ろうとするとドアノブが僕に言った。

「どうしてさ？」僕は聞く。ドアノブの目が、一瞬開く。

「だって、片方ばかりに回されると、バランスが悪いんだよ。こっち側の首の付け根ばかりがこるんだよなあ」

「そうか、ごめん。気をつけるよ」そう言って僕は、トイレに入る。

「ほら、言った先からいつもと同じ方向に回してるよ」

僕は何気なく出した右手で、ドアノブを回していた。考えることなく自然とそうになっている。毎日のことですから無意識だ。

「ああ、ごめん。気をつける前にもう回しちゃっていたね」

「こまるなあ、そんなことじゃ。先が思いやられるよ」ドアノブがふうっとため息をついた。

「なんかいい手はないかなあ」僕は、自分で打つ手を考えることができず、ドアノブに甘えてみる。

「そうだなあ、紙に書いてぶら下げてみたら。なんか、君がいつも首にぶら下げているやつあるだろ、会社に行くときの。あんな感じでさあ。そこに今日は右とか、左とか書いてさあ」

「ああそうか、毎回裏返せばいいんだね」

わかった、といって僕はすぐ画用紙を小さく切って、一方に「右へ」、その裏に「左へ」と書いて、使っていないカード入れに入れた。ひもをつけてすぐにドアノブにかけてあげる。

次の日から僕は、トイレへ行き、ドアノブにかかっている紙を見て、ノブを回すようになった。

「おいおい、それは昨日と同じ方向だよ」三日目、あきれた声でドアノブが言った。

「あれ、そうか、昨日紙を裏返すの忘れちゃったね」僕は気づく。

「君は本当に忘れっぽいからね」

「そうなんだよね。この紙も最初、誰が作ったの？ って思ったくらい」

「重症だね。もう先は見えているなあ。次の手を考えよう」

「ごめんね。そうだ、これからはもう、ドアを開けたままにしよう」

「それじゃ、俺がここにいる意味がなくなるよ。もう君には期待しないよ。うん、毎回俺に聞いてくれ。俺の言うとおりにすればいいよ」

「わかった。面倒かけるけど、よろしくね」

次の日僕は、声をかける前にドアノブを回してしまい、また怒られた。